

高機能自閉症児の自己理解の特性と他者との調整機能の関連 (中間報告)

岐阜大学教育学部 小島道生

The relationships between self-understanding and mental negotiations in children with high-functioning autism

Faculty of Education, Gifu University KOJIMA, Michio

要約

本研究では小学生の高機能自閉症児を対象として、自己理解の特性を明らかにし、その特性が対人関係面にどのような影響を及ぼしているのか検証する。個別の面接調査により、自己理解（自己の定義、自己評価など）と問題解決場面における自己と他者の調整機能について測定した。現在、15名を対象として分析を行った。その結果、自己理解の低さが示されるとともに、問題解決場面では自己と他者の両方を考慮していることが示された。今後、高機能自閉症児の自己理解と他者との調整機能との関係について対照群を設定して分析を進めるとともに、行動観察によりその特徴について解明していく予定である。

【キー・ワード】 高機能自閉症, 自己理解, 問題解決場面

Abstract

This study examined the relationships between self-understanding and mental negotiations in 15 children with high-functioning autism. Participants were interviewed individually about their self-understanding (e.g., self-definition, self-evaluation) and mental negotiations between selves and others in problem solving situations. The results suggested that participants were level with low self-understanding, and were concerned about the benefits for both selves and others in problem solving situations.

【Key words】 high-functioning autism, self-understanding, problem solving situations

問題と目的

自閉症児の自己を巡る問題については、近年、フリス(Frith, 2009)によって「空白の自己」と評され、それは心の盲目、弱い全体的統合、行動の制御メカニズムの変調、という3つの理論に影響を与えているとされている。これは、自閉症の症状を説明する3つの理論が、いずれも自己に深く関係し

ていることを示している。そして、これら 3 つの理論は、対人場面においては、他者理解（心の盲目）、文脈の理解（弱い全体的統合）、行動のコントロール（行動の制御メカニズムの変調）などに影響するものであり、自己を巡る問題が対人関係面にも多大な影響を及ぼすと考えられる。くわえて、知的に遅れない高機能自閉症児は通常学級に所属しており、生来の対人関係の障害から、他者とトラブルになりやすい。したがって、高機能自閉症児においては、障害の中核とされる自己と対人関係の課題についての関係性を解明することが急務であるといえる。

そこで、本研究では高機能自閉症児を対象として自己理解の特性を明らかにし、その特性が自閉症の主症状とされる対人関係面にどのような影響を及ぼしているのか検証する。具体的には、小学校などの友人関係で生じやすい問題解決場面における自己と他者の調整機能を心理学的な実験及び行動観察により検討する。そして、高機能自閉症児の自己理解の特性に基づく対人関係力を育む効果的な支援の在り方について明らかにする。

なお、本稿では、まず高機能自閉症児を対象とした自己理解の特性と他者との調整機能に関する実験研究の途中経過について報告をする。また、本研究では知的に遅れない小学校通常学級に在籍している自閉症を全ての対象とし、その中には広汎性発達障害、アスペルガー症候群も含む。

方 法

1. 対象児

高機能自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群の診断のある小学 1 年生～6 年生 15 名（男児 12 名、女児 3 名）。全員が通常学級に在籍をしていた。また、保護者からの報告などにより、全般的な知的発達については、遅れないことが確認された。

2. 調査内容

①自己理解；先行研究（Lee & Hobson, 1998）を参考に、対象児に対して、自己の定義、自己の評価、自己の過去と未来、自己の関心など自分自身のことについて尋ねる 8 つの質問を行い（例；「～さんの、いいところは、どこですか？」）、自己理解の測定を行った。同時に、その回答理由について尋ねる質問を行い、自己理解の影響要因の解明を試みた。

②他者との調整課題；問題解決場面における自己と他者の調整機能について検討するために、先行研究（鈴木・小島, 2012）を参考に作成した課題を 6 課題実施した。具体的には、自分と他者の意見が対立する場面を設けて、「自己優先」「他者優先」「自分と他者両方優先」といった解決策について分類を行い、検討する。

結果と考察

1. 自己理解の特性について

15 名の対象児について検討を行ったところ、15 名の平均解答数は、4.4 であった。範囲は 1～8 で

あったが、8問全てに解答できた対象児はわずかに1名のみであり、質問の半分程度しか解答できないことが明らかとなった。特に、自己の定義については、解答できていた人数が3名と最も少なく、自己評価や自己の過去と未来などに比べて、解答困難であることが明らかとなった。広汎性発達障害者については、自己感の曖昧さといった点が指摘されてきた(佐藤・中島, 2006)。本研究においても、高機能自閉症児は自己理解の低さが示され、自己理解の困難さを抱えている実態が明らかになりつつある。

2. 他者との調整課題について

問題解決場面における自己と他者の調整について、解答を分類して検討した。6問合計による分類結果について、自己優先が38、他者優先が32、両方優先が20となった。したがって、現段階では対象児全体の傾向としては、自己と他者の両方を考慮しており、いずれかの解決方法に偏っているとはいえない状況が明らかとなった。鈴木・小島(2012)の研究では、定型発達児よりも「自己優先」が認められ、「両方優先」という行動がとりくい傾向であることが示されていたが、今後、定型発達児との比較により検証していく必要があるだろう。

3. 自己理解と対人関係の関係について

15名について、各事例において分析をしたところ、現時点では顕著な特徴は見いださせていない。今後の検討課題である。

今後の研究計画

今後の研究予定としては、以下の3点を予定している。まず第1に、高機能自閉症児の自己理解の特性と他者との調整機能に関する実験研究について、対照群として生活年齢を統制した定型発達児を設定し、自己理解の特性と問題解決場面における調整機能との関係について検証する。第2に、高機能自閉症児の問題解決場面における自己と他者の調整機能に関する研究として、5名程度のグループによる自己と他者の意見が対立する問題解決場面を設定し、行動観察を実施する。第3に、高機能自閉症児の自己理解の特性と他者との関係性について、実際の小学校において行動観察を行い主には友だちとの関わりについて検討する予定である。

引用文献

- Frith, U.(2009) 新訂 自閉症の謎を解き明かす. 富田真紀・清水康夫・鈴木玲子(訳), 東京書籍, Autism : Explaining the Enigma. Second Edition. (2003) Blackwell Publishing.
- Lee, A. & Hobson, R.P.(1998)On developing self-concepts : A controlled study of children and adolescents with autism. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 39, 1131-1144.
- 佐藤由宇・櫻井未央(2010) 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相. 発達心理学研究, 21(2),

147-157.

鈴木ゆかり・小島道生(2012)高機能広汎性発達障害児の問題解決場面における自己と他者の調整. 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学), 60(2), 139-146.